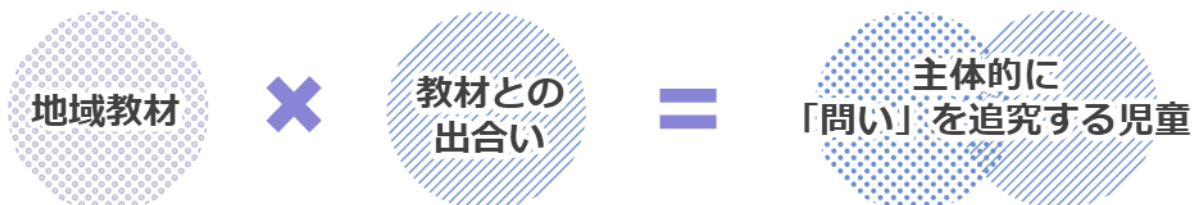


研究の概要

どうすれば、子供たちが主体的に学ぶのか。切実感をもって本気で「問い」の解決を考えるのか。本校における授業改善の課題であった。

そこで、本校では、子供たちの生活に関わりが深い地域教材を積極的に開発すること、そしてその教材との出会いを工夫することで、子供たちがより主体的に「問い」を追究できるのではないかと考え、社会科学を中心に実践的な研究に取り組むこととした。



日本橋スタイル① 地域教材の開発

子供たちが当事者意識をもって考え、主体的に関わろうとする態度を育成するには、身近な地域の社会的事象を教材として取り上げることが極めて効果的である。中央区や東京都、我が国についての理解を深めるため、象徴的な事例として地域教材を開発し、以下の「開発の視点」に基づき、社会科・生活科・総合的な学習の時間等の指導計画に位置付ける。

●地域教材「開発の視点」

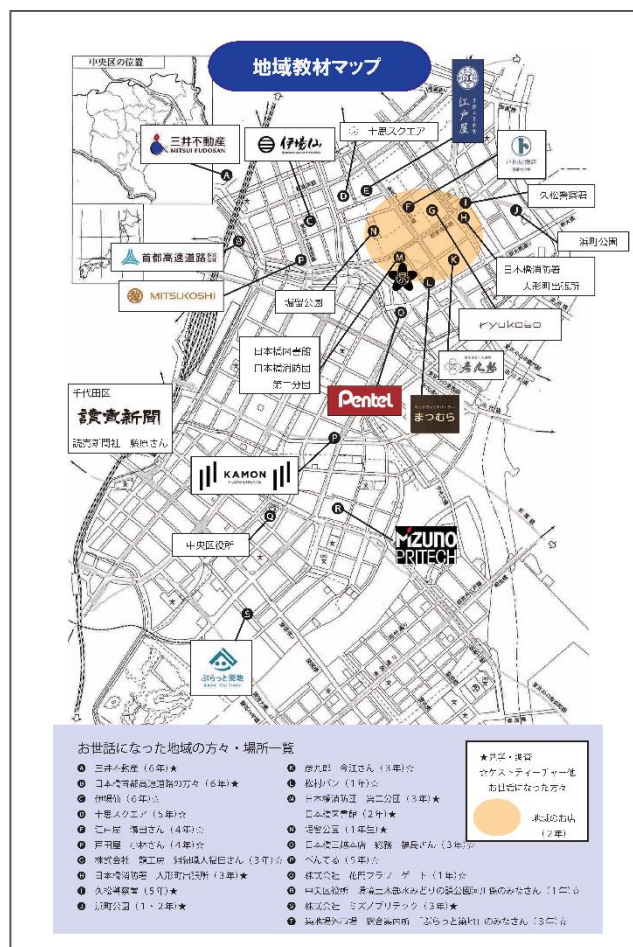
- ①子供の実生活上の経験に結び付く身近なもの
②見学や調査を通して自分とのつながりを実感できるもの
③学習後も見つけ考え続けることができるもの
- ①～③の視点で地域を捉え、素材を集め、学習指導要領のねらいを達成するための教材化を図った。



地域の祭り
「べったら市」
神輿準備の見学
(4年生)



日本橋再開発見学
(6年生)



地域教材一覽

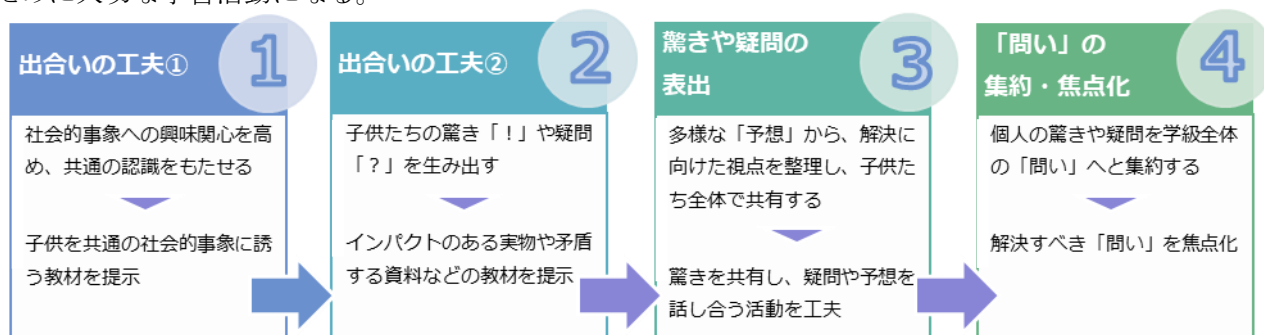
日本橋スタイル②

「教材との出会い」の工夫

授業の「つかむ」場面で、教材を「出会いの工夫①」に加え、「出会いの工夫②」の２段階で提示することにより、「えーっ！」「どうして？」と驚いたり疑問をもったりするとともに、「きっと〇〇ではないかな」と様々な予想を引き出していくことが、子供たちが主体的に「問い」を追究するためには重要である。

特に「出会いの工夫②」を確実に指導計画に位置付けることで、驚きや疑問への予想が生まれ、子供の社会的事象の見方・考え方がより働くとともに、追究に向けた多様な視点を子供たち全員で共有することが可能となる。この学習過程を経ることで、解決すべき「問い」への意識を一層高めることができ、その後の解決への見通しをもちやすくすることも期待できる。

「出会いの工夫②」のあとに表出される子供たちの多様な「予想」を授業において丁寧に整理し、方向付けをすることが、子供の単なる驚きや疑問から、学習で解決すべき「問い」へと焦点化するために大切な学習活動になる。



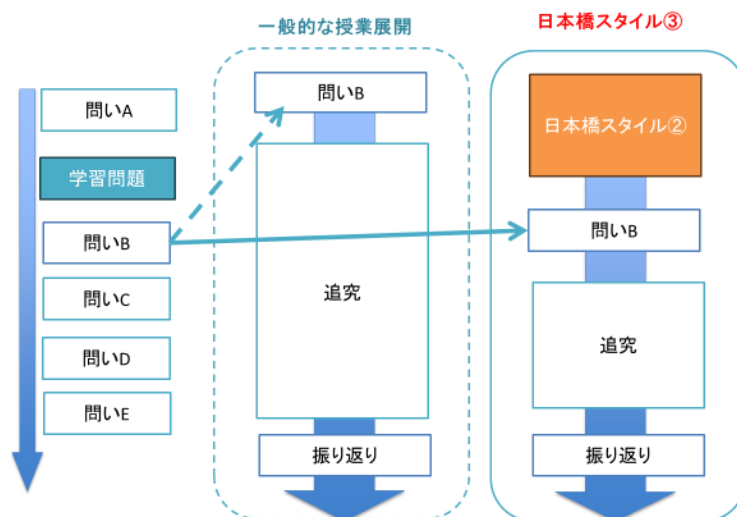
「教材との出会い」の工夫のイメージ

日本橋スタイル③

学習内容のまとまりごとの「問題解決的な学習」

「学習問題」をつかむ段階では教材提示を工夫するものの、その後の授業では、本時のめあてや問いを教師が一方的に提示・確認したり、「学習問題に対する考えをまとめよう！」などと、解決すべき問いを省略したりすると、子供たちの主体的な学びの持続は難しい。単元全体で「問題解決的な学習」を展開するとともに、1単位時間の授業においても「問題解決的な学習」を展開することが、主体的に「問い」を追究するためには不可欠である。

そこで本校では、単元全体で子供たちの主体的な学びを保障するため、学習内容のまとまりごとに、「日本橋スタイル②」を位置付け、子供たちが「問い」を生み出す授業を展開する。



日本橋スタイル③の
単元毎時のイメージ図